
星屑狂想ロマネスク

椎奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑狂想ロマネスク

【Nコード】

N2030I

【作者名】

椎奈

【あらすじ】

不思議な夢を見る、ララ。

ある時は可愛く、幼い夢。

そしてある時は残酷にララの心に突き刺さる悪夢。

その夢が意味するものとは??

第1粒。人が空想できる全ての出来事は起こりうる現実である（前書き）

誰にも愛されることができない、そんな私はハツカのキャンデー。

第1粒。人が空想できる全ての出来事は起こりうる現実である

「——どうしても行かれるというのですか？」

「御国のためなんだ。…どこへ行っても僕は——。」

目が、覚めた。

嗚呼、今日もまたあの夢。

どうして？この夢を私に？？

日本という国の方。

ここはもう、私のいるところは日本などではない。

人々が自分の欲を満たすためだけに、

自分の為だけになってしまった世界。

正確に言えば、その所為で滅びた世界。

私だけ。もう、他には何も無い。

嗚呼、始まりの鐘が鳴った。

もう、私は愛されることなどないのでしょいか？

幸せになれることなどないのでしょいか？

出来るのであれば、違うところに行ってみたい。

恋して、友達が出来て、愛されたい。

そんな叶わない空想をしていたのは、午前0時。

第2粒。たとえ明日世界が滅亡しようとも今日私はリンゴの木を植える（前書き）

来てしまった。過去に。

愛されるかもしれない、と期待した私は、すっぱいレモンのキャンデー。

第2粒。たとえ明日世界が滅亡しようとも今日私はリンゴの木を植える

もうすぐ、0時。

あと5秒。

4、3、2、1…。

0。

——何が起こったんだろう。

私は、此処は何処？

分からない私に、聞こえるのは人の声だけ。

此処は…。私が夢で見る世界。

日本という国…？

では、私は？過去に来たの？

なぜ私なのか理由も分からないまま、体が勝手に動いてた。

『あの…ここ、は、どこ…ですか？』

不思議と。日本語で喋ってた。

私は、英語しか喋れないのに。

「…？ここは、日本。東京だよ。」

『じゃあ…今は、何年、ですか…？』

「…明治、44年、1911年。」

『…そうです、か…ありがとうございました！』

その人にお礼を言って。

何も知らない、異国の地なのに。

不思議と体が動いてた。

第3粒。盲目の時間は時に人を残酷にも傷つける（前書き）

出会いました。

人を愛する気持ちが始まったのは、リンゴのキャンデー。

第3粒。盲目の時間は時に人を残酷にも傷つける

——あてもなく走っていた私。
ついさっきまでの私とは、まるで違う。
どうしたんだろう。

でも、あの、あの夢の会話がされていた場所に。
行きたくて。そうすれば、愛されると信じていたから。

あの場所がどこは分からない。
ただ、なんとなく。

意識が全てこちらに向いているようだった。

早く。なるべく。あの場所へ。

……ここだ。

私の夢の中に出てきた

時計塔。硝子のような、私のような者が触ったら壊れてしまいそう
なほど、
綺麗だった。

第4粒。 恋の灯は時として友情の灰を残す（前書き）

出会いました。

これが、全てを狂わす始まりだとは知らない私。

そんな馬鹿な私は恋焦がれるいちご。

第4粒。恋の灯は時として友情の灰を残す

ここに、あの方達はいて、この時代を生きて…。
だけど、その夢を見た私があの方達と同じ時代にいる…。
とても
とても

不思議な音がした。

昔、祖母から習った歌。

此処に來ると、口ずさみたくなる。
無意識に、歌ってしまった。

変な感覚だった。

感情の全てがこの歌に持っていかれて。

あの方が見ているとも知らずに。
このときの私は、全然気づかず。

分かっていたのは、あの方だけだった…。

第4粒。 恋の灯は時として友情の灰を残す（後書き）

祖母から習った曲…というのは
私の中で「歪みの国のアリス」の「M Y S w e e t P a i n」
のイメージです。

第5粒。「君に壊されたよ」「何を?」「僕の孤独を。」（前書き）

運命が繋がる。

孤独が和らぐ。そんな私はオレンジのキャンデー。

第5粒。「君に壊されたよ」「何を?」「僕の孤独を。」

歌い終えた。

とても、心が満たされてく。

——パチ、パチ、パチ。

「……!誰、ですか?」

「上手いなあ、歌!」

その方の声に、なんだか胸が高鳴って。

「ごめん!俺、拓駒^{たく}って言うんだ!」

「あ、申し遅れました!ララ、って、言います!。」

「ララかあ!ララって、西洋人だろ?」

……名前呼ばれた。

とても、かつこいい方。顔もだけど、きつと性格も。

「あ、はい!。」

「日本語上手いなー!」

「ありがとうございます。」

「拓駒でええよ!!俺もララって呼んでるし!」

「じゃあ、拓駒さん、で。」

「んーま、いつか!…それより、ララ。」

「は、い?」

するとその方、拓駒さんは、急に真剣な顔になって。

その顔が…またかつこよくて。胸が鼓動を急ぐ。

「ララ、君に、壊された、よ。」

「なに、…を?」

……聞いたことがある台詞。確か、この答えは…。

「俺の孤独を。」

夢に堕ちる、音がした。

第6粒。 恋は空腹で生き、満腹になって死ぬ。（前書き）

あなたに出会ったその時から、私は恋に落ちていたというのに。
それを気付かなかった愚かな私はブドウ味のキャンデー。

第6粒。恋は空腹で生き、満腹になって死ぬ。

『孤独、ですか…？』

「ごめん！忘れて…！」

あんな、真剣な顔をされて、忘れられるはずがない。

『は、い…。』

私の、嘘つき。

「それより、いつ東京へ？」

…どうしよう。タイムスリップなんて、言えるはずないし…。

『今日、来ました。』

嗚呼、嘘をつくときはすぐに答えが出る。

「そうなんや！…じゃあ、俺が案内してやる…！」

『え？！……っ！』

断ることもできないまま、拓駒さんに連れられて。

「ここは、ここら辺で一番大きな店…！」

さつきから見られてる気がする。

「…ララ？」

『あ、はい、っ』

「どうしたん…？」

『あの、さつきから、見られてる気がする…。』

「…ああ。それは、多分…。」

分かった。

『私の髪の色、と目の色…ですか？』

「！うん、まあ、」

確かに。私の髪は金髪に近い茶色で、目の色はミルクブラウン。
服だって、明治では考えられないほど軽いし。
それでも現在ではロリータ^{あっち}なんだけど、な。

此处でも時代の違いが。

『拓駒さん、も私なんかといたら、変な目で見られちゃいますよ？』
「俺はえーの！見かけで判断なんかしたらいかん、って母さんが言
ってたから。それに…。」

「こんなにも、ララはいい子なんだから。」

拓駒さん。違うよ。

私はいいこなんかじゃ、ないよ。

みんなを裏切って、人を信じなかった、

悪い子だよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2030i/>

星屑狂想ロマネスク

2010年10月17日07時16分発行